

天使の像

時を超えて子どもたちを見守る

戦後の再建に伴って誕生した、2人の天使たち。そこに込められた思いを探っていきましょう。



恵心館のシンボルとなった現在の姿(縦:約3.6m×横:約1.8m)



(※2)制作用のスケッチ。「破風彫刻下図」の文字が読み取れる

偶然見つかった 制作時の貴重な記録

香川大学教育学部附属高松小学校の一角に建つ「恵心館」の1階には、児童らが給食をとるランチルームがあります。その南側の壁面に掲げられた、大きな白い石膏レリーフ。年少少女の姿をした2人の天使の周囲にハトが舞い、慈愛に満ちた表情とともに、どこか荘厳さも感じさせる作品です。

その制作風景を写した貴重な写真(※1)が、同小学校の副校長室で近年見つかりました。「私が副校長になってすぐ、部屋の掃除をしていたところ、ロッカーの後ろから古い紙にくるまれて出てきたんです。開いてみて驚きました」と、大嶋和彦副校長。制作スケッチ(※2)は額装されて長らく会議室に飾ってありますが、写真を目にしたのは初めてだったと振り返ります。「こんなところにあるなんて、誰も気づかなかったんでしょね」。

モノクロの写真の中、こちらに背を向けて天使の像の前に立つのは、彫刻家・新田藤太郎。1888年に香川県で生まれ、高松工芸高校から東京美術学校(現・東京藝術大学)に進み、文展や帝展で入選を重ねて審査員も務めました。太平洋戦争中は代表作とされる国威発揚の像「肉弾三勇士」をはじめ、数多くの銅像を手掛けています。金

す。親戚の子が附属高松小学校に通っていたこともあり、「材料費だけでいいよ」と快諾したとか。

小学校に残るスケッチには、藤太郎の署名とともに「昭和廿八年秋」「香川大学附属中小学校」「破風彫刻」といった文字が記されています。このスケッチは制作依頼者の一人が藤太郎から譲り受け、のちに学校に寄贈されたもの。「正確なところはわかりませんが、制作風景の写真も、おそらくスケッチと同時期に本校へ渡ったものと思われ」と大嶋副校長。原型が出来上がった際に香西町のアトリエの庭先で写したものだとは回顧する記録も残っています。

体育館の落成は1953年10月16日。当時まだ珍しかったという鉄筋コンクリートの体育館の壁面を天使の像が飾りました。以来、1983年に恵心館が完成するまで、2人の天使は運動場で駆ける児童らを見守ることになります。

やさしい心の象徴として

恵心館に移設されるに当たって、長年の風雨でいたんだ像は丁寧に修復されました。「恵心館」の名前にも「天使のように温かい思いやりのある、やさしい心の人間になってほしい」という思いが込められていて、今や同館を象徴する作品となっています。

制作スケッチによると、像のサ

属供出などで失われた像も多いものの、戦後は香川県に戻って制作を続け、高松市立中央公園の「菊池寛」玉椿象谷像など、今も県内各地に作品が残っています。藤太郎はなぜ、天使の像を手掛けることになったのでしょうか。



(※1)原型完成時に撮影されたという写真

体育館の壁面で 30年の時を重ねて

制作時期は、戦後の復興期にさかのぼります。同校百年史によれば、空襲で焼け落ちた小中学校校舎の再建が進み、1953年秋には現在の第2体育館が完成を迎えようとしていました。そんな折、「体育館の正面に何か裝飾がほしい」というアイデアが持ち上がり、戦争で香西町に疎開してきていた藤太郎に白羽の矢が立ちま

イスは「市拾式尺」「高サ6尺」、つまり約3・6×1・8メートル。ランチルーム南壁の大半を占める圧倒的な存在感ですが、自然と空間に溶け込んでやさしい雰囲気醸してもいます。体育館の壁面に掲げられていた時と違って、細部まで間近で眺めることができ、天使の深いまなざしの奥まで覗き込めるかのようです。

「なぜ天使をモチーフにしたのかはわかりません。でも、天使の周りにはばたくハトは平和の象徴でもありますから、戦争を経験した藤太郎が像に込めた思いが、なんだか垣間見えるような気がします」と大嶋副校長。これからも、天使たちは子どもたちの成長を静かに見守り続けることでしょう。

学内でも作品を発見！



幸町南キャンパスの南7号館ロータリー付近にある隈本繁吉先生(香川大学経済学部的前身である高松高等商業学校 初代校長)の胸像も、実は新田藤太郎の作品なんです。今回の取材に先立って気づいた時は、広報スタッフも鳥肌が立つほど興奮しました。